

おきなわ・海歩き 第3回
星砂は生きている

鹿谷麻夕（しかたに・まゆ）

沖縄の集落では、よく畑や浜辺とのさかいめに、モクマオウの防風林やアダンの自然林が見られます。ほどよく色付いたアダンの実を初めて見る人は、たいてい「あ、パイナップル！」と叫ぶことになるでしょう。オレンジ色に熟した実からはあまーい香りもしますが、かたい繊維が多くて食べられません。ほらパインだよと説明するいたずらガイドもいますので、お気を付けあれ。

パインもどきの実る林をくぐり抜けると、小道の向こうから白い砂浜と青や緑のイノーが目飛び込んできます。その美しさは何度訪れても息を飲むほど。でも、海に駆け出したくなるのをちょっと我慢して、足元の砂浜をじいっとよく見てみましょう。

砂の上に、何か小さなカタピラのような跡があるのがわかりますか（写真1）。アダンの林の下や、グンバイヒルガオなどの海浜植物が生えているあたりによく見られます。跡のくっきりした、新しそうなカタピラをたどると、その先にコソコソと歩く貝殻を発見。オカヤドカリの仲間です（写真2）。方言でアーマンと呼ばれて親しまれるこの生き物、実は天然記念物なのです。急に近寄るとチャキッと貝殻の中に隠れて、大きいハサミでぴったりフタをしましますので、慌てずにゆっくり観察しましょう。憶病者は一度引っ込んだらなかなか出てきませんが、はぁと暖かい息を吹きかけると、もぞもぞと動き出したりします。で



図1 カタピラのような足跡の先をたどってみよう



図2 オカヤドカリの仲間

も逃げ足はかなり速い。自分がヤドカリの大きさだったら、砂の上であのスピードにはとても敵いません。打ち上げられた巻貝をお宿にリサイクルしているヤドカリですが、近ごろは住宅難で、古い貝や欠けた貝にも入っています。もし適当な大きさの空き家があれば、ヤドカリの目の前に置いてみましょう。「引っ越し」が見られるかもしれません。ハサミを器用に使って入口の大きさを測り、気に入れば、殻をくるくると回して中の砂やゴミを出します。ぼってりとしたヤドカリの「おなか」にお目にかかれるのは、引っ越しの瞬間だけ（そんなもの見たくない?）。「おなか」はちゃんと、巻貝に添うように左側にくるりと巻いているんです。

さて前回、沖縄の白い砂浜は死んだサンゴや貝殻でできていると説明しました。他にも、あわ粒くらいの大きさの肌色の砂がたくさん混ざっていることがあります。場所によっては砂のほとんどが肌色の粒でできていることもあります。実はこの砂の材料も、ある生き物の殻なのですが、それが何だかわかるでしょうか。

星の砂というのをご存知でしょう（写真3）。お土産にもなっている、小さな星の形をした砂粒。これが実は砂浜を作るもう一つの重要な生き物の殻です。1ミリほどのこの粒は、有孔虫と呼ばれる仲間の殻で、顕微鏡で見ると殻に小さな穴がたくさんあいている所からこの名がついています。しかもこの生き物は単細胞の原生生物、なんとアメーバの親戚です。つまり星の砂はアメーバの殻！ 生きているときは海藻の茂みの中に粘液のような糸（アメーバの仮足）を出してくっついていきますから、潮だまりに海藻が生えていたらよく見てみましょう。トゲのぴしっと生えた小さな粒が見つかると思います（写真4）。有孔虫にはたくさんの種類がありますが、よく見られるのは、いわゆる星形の「星の砂」のほかに、膨らんだ円盤から棒が何本も突き出たような「太陽の砂」や、コインのように丸く平らな「ゼニイ



写真3 星の砂

シ」でしょう。ゼニイシは直径5ミリほどまで大きくなり、海草（シーグラス）の上にたくさん貼りついています。

星の砂や太陽の砂のほとんどは、浜に打ち上げられるとトゲの部分が削れてしまい、ただの丸い粒になってしまいます。これが「肌色の砂粒」の正体です。ということは、砂浜の砂のほとんどが有孔虫、という場所もあるのがおわかりいただけるでしょうか（写真5）。サンゴのほかにも、膨大な数の単細胞の生き物が、長い年月をかけて砂浜という地形を作っているのです。

打ち上げられた有孔虫の中には、運良くトゲが残っているものもあります。砂浜に行ったら手のひらを砂に押し当てて、くっついてきた砂の中からじっくり星の砂を探してみるのもいいでしょう。さて、陸の上はこのくらいにして、潮が引いたらそろそろ海の方へ歩き始めるとしましょうか。



写真4 生きているときの太陽の砂と星の砂



写真5 この砂はほとんどが有孔虫。星の形が見つかるかな...